前 入学試験問題

国語（理科）

（配点八〇点）

令和七年二月二十五日　九時三〇分～一一時一〇分

注意事項

一、試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
二、問題はすべて新課程と旧課程とに共通です。
三、この問題冊子は全部で十七ページあります。落丁、乱丁または印刷不鮮明の箇所があったら、手を挙げて監督者に知らせなさい。
四、解答には、必ず黒色鉛筆（または黒色シャープペンシル）を使用しなさい。
五、解答用紙の指定欄に、受験番号（表面二箇所）、科類、氏名を記入しなさい。指定欄以外にこれらを記入してはいけません。
六、解答は、必ず解答用紙の指定された箇所に記入しなさい。
七、解答は、一行の枠内に二行以上書いてはいけません。
八、解答用紙の解答欄に、関係のない文字、記号、符号などを記入してはいけません。また、解答用紙の欄外の余白や裏面には、何も書いてはいけません。
九、この問題冊子の余白は、草稿用に使用してもよいが、どのページも切り離してはいけません。
十、解答用紙は、持ち帰ってはいけません。
十一、試験終了後、問題冊子は持ち帰りなさい。

◇M2(684—25)

草稿用紙(切り離さないで用いよ。)

第一問

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

鏡像を自己として認知できるようになるには、生後一年半〜二年程度の時間がかかるといわれている。B・アムスターダムの古典的研究によると、生後一年ごろまでの乳児は、鏡に映った身体を他者として知覚している。鏡に向かって手を伸ばし、微笑(ほほえ)みかけ、頬ずりをするなど、ア鏡像を遊び相手として扱うような振る舞いを見せるのである。ところが、一四ヵ月ごろから振る舞い方に変化が起こり始め、鏡像を見て感嘆したり困惑したりという揺らぎのある反応を見せつつ、全般的に鏡像を避ける行動が増え、二〇ヵ月ごろまでこの傾向が続く。この時期を過ぎると、二四ヵ月に向かって鏡を見ながら自己の身体をa(タンサク)する自己指向行動が増えていく。

生後間もない乳児にとって、自己の身体は、空腹や渇きのような内受容感覚、身体を動かすと筋肉や腱(けん)で受容される固有感覚によって主に構成されており、視覚的な関心を惹(ひ)く対象ではない。むしろ乳児が視覚的に惹きつけられるのは、視野に登場する母親や父親の顔である。M・ジョンソンらの研究で知られるようになったとおり、新生児は各種の対象の中でも人間の顔を好んで注視する傾向がある。また、この傾向は実物の顔だけでなく、目・鼻・口などのパーツがあり、それが人の顔のように配列されている絵でも確認することができる。つまり、生後一年ごろまでの乳児にとって、身体に由来する体性感覚的な情報と、外界に由来する視覚的情報とは分断されており、いまだ統合されていないのである。鏡に映る視覚的な全身像を、「ここ」にある体性感覚的な情報と結びつけることができるようになるのに、生後二年近い時間がかかるということである。

両者の統合過程において、何が起きているのだろうか。イ鏡像認知が成立する途上の移行期に、鏡像を回避する行動が見られるところが興味深い。これは別の研究でも確かめられている。時期がややずれるが、R・ザゾによると、一七ヵ月ごろから鏡を前にす

る乳児には忌避反応が見られるという。困ったような表情をしたり、鏡像に対して顔をそむけたり、鏡の前でフリーズしたり、鏡像から遠ざかろうとしたり、といった反応である。すべての乳児になんらかの忌避反応が見られ、平均的に三ヵ月～五ヵ月程度続くという。

鏡に対する回避的な反応が生じる以前、乳児にとって鏡像は「他者」として経験されている。鏡の中の身体は、視覚的には「そこ」に見えているが、「ここ」で生じている身体由来のさまざまな体性感覚とは結びつかない。これに対して、鏡像認知ができるようになった乳児にとって鏡像は「自己」として現れる。視覚的に「そこ」に見えている像が、「ここ」で生じている身体由来の体性感覚としっかりと結合している。手を上げ下げすれば、「ここ」で豊かな運動感覚が生じると同時に、「そこ」に見えている手も上がったり下がったりする。運動感覚と視覚像は緊密に連合している。鏡の中に自分が見えるとは、このような経験である。

移行期の乳児にとっては、鏡像はどっちつかずの中途ハンパな存在だろう。鏡を見ると他者のような視覚像が映っているにもかかわらず、それがこちら側の「ここ」で生じている体性感覚と奇妙にも連動しており、どのように受け止めてよいのかいまだ正解が見当たらず、これが落ち着きのない回避行動を引き起こす原因になっているように見える。移行期の落ち着かなさに決着をつけるには、鏡の中に見えている視覚像が自己自身の視覚像であることに気づき、受け入れるしかない。これはどのように可能になるのだろうか。

この点に本質的に関連しているのが、G・ギャラップによるチンパンジーの鏡像認知研究である。チンパンジーは鏡像認知ができる数少ない動物の一つであるが、彼の報告によると、群れから引き離して単頭飼育したチンパンジーは鏡像認知ができるようにならなかった。チンパンジーの鏡像認知を試す際には、ヒタイや耳のように鏡を見ないと確認できない身体部位にマークを付け、鏡を見せてそれに気づくかどうかを試す「マークテスト」と呼ばれる手法を用いる。ギャラップが報告するところでは、単独で飼育されたチンパンジーは群れで育ったチンパンジーとは違ってマークに関心を示さず、鏡を見ながらマークに手を伸ばす自己指向行動も見せなかった。

ここから推測できるのは、鏡像認知が単に「ここ」で生じる体性感覚と「そこ」に見える視覚像との連合だけで成り立ってはいない

ということである。群れで育ったチンパンジーは、「他者の身体」に囲まれて育っている。チンパンジーは成長の過程で、「自己から見た他者の身体」と「他者から見た自己の身体」を互いに交換することで、自己の身体が外的な視点から見るとどのように見えるのかということを学習するのである。群れで育ったチンパンジーは「他者から見た自己の身体」を最初から知っているからこそ、鏡を初めて見たとしても、ウ そこに映っている身体の像が「外的視点から見た自己の身体」であると気づくことができるのである。

鏡像認知は、体性感覚と視覚を結びつける単なる連合の問題には還元できない。単独で飼育されたチンパンジーにとっては、そもそも両者を結びつける動機も必然性もないことに注意しておこう。人間も同様である。他者とともに育つ乳児にとって、他者にケアされるという身体的相互作用は決定的に重要である。自己の視点から他者の身体を見るだけでなく、自己の身体が他者の視点からどのように見えるのかに気づくとき、「ここ」で生じている体性感覚と「そこ」に見えている視覚像とが有機的に連合するのである。この過程はとりわけ、他者の身体にある「顔」が自分の身体にもついていることに気づくうえで決定的に重要である。

メルロ＝ポンティも、発達心理学者H・ワロンの研究に沿って鏡像認知に言及しながら、次のように指摘している。

> 彼「幼児」にとっての問題は、身体の視覚像と身体の触覚像が空間中の二点に位置しているのに実際には一つに過ぎないと理解することではなく、鏡の中の像が彼の像であり、他人が見ているところの彼の像であり、他の主体に対して彼が提示している外観であると理解することにある。この総合は、知性による総合なのではなく、他者との共存に関する総合なのである。

ここでの文脈に沿って言い直そう。鏡に映る身体の姿を「自己の身体」として認知できるようになるには、たんに体性感覚と視覚を連合するだけでは十分ではない。「ここ」にある自己の身体が、「そこ」にいる他者の眼から見てどう見えるのかに気づくことが必要である。鏡像認知はたんに多感覚統合の課題ではなく、「見る―見られる」という関係において他者と共存することを学ぶ経験に他ならないのであり、その意味で エ 私たちの身体イメージには他者の眼差(まなざ)しが刻印されているのである。この点が明らかになったことで、自己身体の「付き合いにくさ」の源泉に一歩近づくことができたように思う。

（田中彰吾『身体と魂の思想史――「大きな理性」の行方』による）

〔注〕 ○メルロ＝ポンティ――Maurice Merleau-Ponty（一九〇八～一九六一）。フランスの哲学者。

設問

(一) 「鏡像を遊び相手として扱うような振る舞いを見せる」(傍線部ア)とあるが、それはなぜか、説明せよ。

(二) 「鏡像認知が成立する途上の移行期に、鏡像を回避する行動が見られる」(傍線部イ)とあるが、それはなぜか、説明せよ。

(三) 「そこに映っている身体の像が『外的視点から見た自己の身体』であると気づくことができる」(傍線部ウ)とあるが、それはなぜか、説明せよ。

(四) 「私たちの身体イメージには他者の眼差しが刻印されている」(傍線部エ)とはどういうことか、本文全体の趣旨を踏まえて一〇〇字以上一二〇字以内で説明せよ(句読点も一字と数える)。

(五) 傍線部a・b・cのカタカナに相当する漢字を楷書で書け。

a タンサク　b ハンパ　c ヒタイ

草稿用

第二問

次の文章は『撰集抄』の一話である。これを読んで、後の設問に答えよ。

昔、御室戸の法印隆明といふ、やんごとなき智者、もろこしに渡り給はんとて、西の国におもむきて、播磨の明石といふ所になん住みていまそかりけるに、ア<u>あさましくやつれたる僧</u>の、来たりて物を乞ふ侍り。さながら赤裸にて、ゑのこを脇に抱き侍り。人、後先に立ちて、笑ひなぶりける。あやしの者やと思して見給へば、清水寺の宝日上人にていまそかりける。イ<u>ひが目にやとよく見給へど、さながらまがふべくもあらざりければ、かきくらさるる心地して、伏しまろびて、「あれはめづらかなるわざかな」とのたまはせければ、上人ほほゑみて、「まことに物に狂ひ侍るなり」とて、走り出で給ふめるを、人あまたして、取りとどめ奉らんとし侍りけれども、さばかり木暗き繁みが中に入り給ひぬれば、ウ<u>力なくやみ侍りけり</u>。

隆明法印は、あまりすべき方なく悲しく覚え給ひて、その事となく、その里にとまり居給ひて、広く尋ねいまそかりけれども、その後はまたも見えずなり給ひにき。さて里の者にくはしく事の有様を問ひ給へりければ、「いづくの者とも人に知られで、この村に住みても二十日ばかりなり」とぞ答へ侍りける。エ<u>この事、限りなくあはれに覚え侍り</u>。何と、げに世を捨つといふめれど、身のあるほどは、着物をば捨てずこそ侍るに、あはれにもかしこくも覚え侍るかな。

およそ、この上人はよろづ物狂はしき様をなんし給へりけるなり。ある時は、清水の滝の下に寄りて、合子といふ物に水を受けて、隠れ所をなん洗ひ給ふこと、常の態なり。いみじく静かに思ひ澄まし給ふ時も侍るめり。一方ならずぞ見え給ひし。澄み渡る心の内は、いつも同じさきらなれども、外の振る舞ひは百に変はりけるは、よしなき人の思ひを、我のみ一方にはとどめじと思しけるにや。

この上人ぞかし、中関白の御忌に、法興院に籠りて、暁方に千鳥の鳴くを聞き給ひて、

オ 明けぬなり賀茂の河原に千鳥鳴く今日もはかなく暮れんとぞする

と詠みて、『拾遺集』に入り給へり。明けぬるよりはかなく暮れぬべき事の、かねて思はれ給へりけるにこそ。かの『拾遺集』には円松法印と載りて侍るは、上人の事にこそ。

〔注〕 ○御室戸――現在の京都府宇治市にある三室戸寺。
○ゑのこ――子犬。
○合子――ふた付きの容器。
○さきら――才知。
○中関白――藤原道隆。
○法興院――藤原道隆の父、兼家が別邸を寺としたもの。
○『拾遺集』――三番目の勅撰和歌集。ただし実際には『後拾遺和歌集』に、ほぼ同じ歌が「円松(または円昭)法師」作として載る。

設問

(一) 傍線部ア・イ・ウを現代語訳せよ。

(二) 「この事、限りなくあはれに覚え侍り」(傍線部エ)とあるが、語り手はなぜそのように感じたのか、説明せよ。

(三) 傍線部オの歌は、どのようなことを表しているか、説明せよ。

草稿用紙（切り離さないで用いよ。）

第三問

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。ただし、設問の都合で送り仮名を省いたところがある。

人恒病執着。然亦不可概論。良繇学以好成、好之極名着。羿着射、遼着丸、連着琴与。夫着弈者、至屏帳垣牖皆森然黒白成勢、着書者、至山中木石尽黒、学画馬者、至馬現於牀榻間。夫然後以其芸鳴天下而声後世。何独於学道而疑之。

是故参禅人、至於茶不知茶、飯不知飯、行不知行、坐不知坐、発箧而忘扃、出厠而忘衣。念仏人、至於開目閉目、而観在前、摂心散心、而念恒一。良繇情極志専、功深力到、不覚不知、忽入三昧。赤猶鑽燧者、鑽之不已而発焔、煉鉄者、煉之不已

而成レ鋼ヲ也。

概シテ慮ニ其ノ着センコトヲ而悠悠蕩蕩、如ニ水ノ浸レ石ヲ、窮ニ歴ストモ年劫ニ何ノ益カ之レ有ラン。

是ノ故ニ執滞之着ハ不レ可レ有カラル、執持之着ハ不レ可レ無カラル。

（雲棲袾宏『竹窓二筆』による）

〔注〕○羿着レ射、遼着レ丸、連着レ琴——羿は弓、遼はお手玉、連は琴の名人として知られる。
○弈——囲碁。　○牖——まど。　○森然——びっしりと。　○牀榻——ベッド。
○学道——ここでは仏道を学ぶこと。　○観在レ前——仏などを観想すること。
○三昧——深く集中した境地。　○鐩——火打石。　○慮——心配する。
○蕩蕩——ゆったりと気ままなさま。　○年劫——長い年月。

設問

(一) 傍線部a・b・dを平易な現代語に訳せ。

(二) 「何独於二学道一而疑レ之」(傍線部c)を、「之」の内容がわかるように、現代語に訳せ。

(三) 「執滞之着不レ可レ有、執持之着不レ可レ無」(傍線部e)とはどういうことか、本文の趣旨を踏まえて説明せよ。

草稿用紙（切り離さないで用いよ。）